

Title	「工芸」と「美術」のあいだ 明治中期の京都の産業美術
Author(s)	平光, 睦子
Citation	大阪大学, 2009, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/49415
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、 〈a href="https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed"〉 大阪大学の博士論文について 〈/a〉 をご参照ください。

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

【45】

氏名	平 光 睦 子
博士の専攻分野の名称	博士（文学）
学位記番号	第 22626 号
学位授与年月日	平成21年3月24日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当 文学研究科文化表現論専攻
学位論文名	「工芸」と「美術」のあいだ 明治中期の京都の産業美術
論文審査委員	(主査) 教授 藤田 治彦 (副査) 教授 上倉 庸敬 教授 内田 次信

論文内容の要旨

本論文は明治中期の京都の産業美術において「工芸」という分野と「美術」という分野とのあいだにあった諸問題を再検討し、当時成立しつつあった「美術工芸」という分野においてその外延をかたちづかったものを明らかにしようとしたものである。

第一章では、「工芸」「美術工芸」と京都とのかかわりが概説されている。第二章では、内国勲業博覧会などの各種博覧会における「工芸」と「美術工芸」の分類上の扱いが分析され、整理されている。第三章では、ワグネルの「工業の方針」を軸に、その「工芸」観と「工業」観についての検討がなされている。第四章では、フェノロサの「美術工芸」論とその京都への影響についての考察がなされている。第五章では、京都の川島甚兵衛の織物における「装飾」と「美術工芸」について、明治宮殿の室内装飾、1893年シカゴ万国博覧会の日本館「鳳凰殿」などを例に、考察が加えられている。第六章では、岡倉天心の「美術教育施設ニ付意見」を通じて、明治時代の「図案」と「工業」との関係についての考察が進められている。そして、第七章で、「誰のための工

芸」というもうひとつの視点を加えて、論が結ばれている。

以上のように、本論は、京都の産業美術に関する論説・言説の調査研究であり、京都関係の史料をおもな調査対象としながらも、より広い視野から「美術工芸」という概念と実体の成立を探り、その意味を考察している。一般的には、「美術」と「美術工芸」とを分けるのは表現形式であり、「工業」と「美術工芸」とを分けるのは生産手段であるが、もうひとつの重要な分類の基準に「誰のための工芸」という対象を見る観点、ならびに、「美術」や「工芸」といった概念が導入される以前の日本の「工（たくみ）」をどう捉えるかという問題が残ると本論は指摘し、京都においては、新しいものを受け入れて変化し続けるという道を選択しながらも、伝統的な工芸技術の継承という期待があり、それが中庸を貫く姿勢につながった、と結論する。

論文審査の結果の要旨

本論文は、一連の内国勲業博覧会報告書をはじめとする各種博覧会の報告書や『京都美術協会雑誌』等の明治期の史料を精査し、「美術工芸」という概念の京都への導入の過程と反応を調べ上げ、その京都、日本、そして工芸と美術にとっての意味について考察したものである。「美術工芸」の概念に関しては、それが内国勲業博覧会をはじめとする博覧会や教育制度を通して明治期に導入されたことは、すでに複数の研究者によって指摘されている。しかし、それは専ら制度をつくる側の史料の検討の結果であった。そこに制度を受け入れる側からの検討を加えたところに本論の最大の特徴がある。京都における産業美術の研究という設定がそれである。

「美術工芸」には「美術的価値をもった工芸」という字義通りの意味があるが、それだけでは、その微妙な存在を十分に説明できない。「美術工芸」を上記の意味で捉えた場合、その「美術」自体、明治期に西洋から導入された概念であり、西洋の価値基準で日本の伝統的技芸を計るということになり、それが「美術工芸」という概念が曖昧さから逃れえない一因となっている。

本論は、ワグネル、フェノロサ、岡倉天心という、明治の「工業観」「工芸観」「美術観」の形成に重要な役割を果たした論者を選び、彼らの思想や発言が、日本の伝統的な美術と工芸の都でもある京都に及ぼした影響の有無あるいは程度、そして、同地における反応を、当時の史料に基づいて比較検討している。これまで染織、陶芸等、個別の工芸の範囲内での変遷をたどる研究はあったが、工芸全般を視野に入れた研究はまれである。また、東京美術学校の図案科および美術工芸科や京都市美術学校の工芸図案科にとどまらず、東京工業学校の工業図案科や当時の工業教育の代表的指導者手島精一の「工業」「工芸」観についても検討している。十分作品に即しているとはいえないが、「美術」と「工芸」だけではなく「工業」をも対象とし、理論的な側面での考察は本研究でかなり進められた。

論文全体として、京都の特殊性を十分整理しきれていないといった問題も残されているが、皇室技芸員といった諸制度との関係を検討し、伝統的工芸技術を継承、国際博覧会等で国家を代表する、国家のための「美術工芸」といったいくつかの観点の指摘、個別工芸を超えた工芸全体の把握の試み、そして「工業」までも比較の対象とした広い視野からの考察は価値が高い。以上の理由により、本論文を、博士(文学)の学位にふさわしい学術的価値を有するものと認定する。